

ブドウ（殺菌剤・殺虫剤）
指針採用農薬一覧表

病害虫名 農薬名（商品名）	黒とう病	晩腐病	うどんこ病	べと病	さび病	褐斑病	灰色かび病	枝膨病	白紋羽病	アザミノキイロ	ヨコバテンヒメ	スカシバ類	ブドウトラカミキリ	コガネムシ類	ハダニ類	カイガラムシ類	ハマキムシ類	ウハスモンヨト
ICボルドー48Q				●														
ICボルドー66D	△	△		●	●													
アーデントフロアブル										●	●			△	△			
アクタラ顆粒水溶剤										●	●					△		
アディオフロアブル										●	●			●				
アディオン水和剤										●	●			●				
アドマイヤーフロアブル										●								
アミスター10フロアブル	△	●		●	△	●	△	△										
アリエッティC水和剤	△	△		●			△											
アリエッティ水和剤				●														
インターフロアブル	△		△			●	△											
インプレッション水和剤							●											
エクシレルSE										●				●				●
エトフィンフロアブル				●														
園芸ボルドー	△	△	△	●	△	△												
オーソサイド水和剤80	△	●		●		●	△	△										
オラクル顆粒水和剤				●														
オルフィンプラスフロアブル		△	△				●											
オロンディスウルトラSC				●														
オンリーワンフロアブル	△	△	△		△	●	△											
キノドーフロアブル	●			△				●										
グレーシアフロアブル										●								●
ゲッター水和剤							●											
コサイド3000				●	△													
コテツフロアブル										●	△			△	●			●
コルト顆粒水和剤										●						△		
カナメフロアブル	●		●		△	●	●											
カネマイトフロアブル															●			
ケンジャフロアブル	△		●			△	●											
コロマイト水和剤															●			
サイアノックス水和剤											△	●					△	
ジャストフィットフロアブル				●														
ジマンダイセン（ベンコゼフ）水和剤	●	●		●	●	●												
スイッチ顆粒水和剤		●					●											
スカウトフロアブル										△	●			●			△	
スタークル/アルバリン顆粒水溶剤										●	△	●	△			△		
ストロビードライフロアブル	●	△	△	●	△	●	△	●										
スミチオン水和剤40											●	●	●	△				
ダニコングフロアブル															●			
ダントツ水溶剤										●	△		△	△		△		

(1) 黒とう病 *Elsinoë ampelina*

(生態と防除のねらい)

- ① 結果母枝や巻きひげなどで越冬するので、伝染源の巻きひげや枯れ枝の除去を徹底する。
- ② 4月の降雨によって、若葉や新梢に感染し1～2日間で発病する。発病後は、二次伝染を繰り返し蔓延する。
- ③ 本病は、発病を見てからの防除は困難なので予防散布に重点をおく。休眠期の薬剤散布を行い、特に発芽初期（展葉1～2枚）の薬剤散布が遅れないように注意す
- ④ 雨媒伝染性なので、雨よけ栽培を行うと防げる。

FRACコード*	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
M01	キノンドーフロアブル	有機銅水和剤	普	
M03	ジマンダイセン（ペンコゼブ）水和剤	マンゼブ水和剤	普	
M03	チオノックフロアブル	チウラム水和剤	普	
M07	ベフラン液剤25	イミノクタジン酢酸塩液剤	劇	
M09	デランフロアブル	ジチアノン水和剤	劇	
7	カナメフロアブル	インピルフルキサム水和剤	劇	
11	ストロビードライフロアブル	クレソキシムメチル水和剤	普	
52	ミギワ20フロアブル	イブフルフェノキン水和剤	普	

(2) 晩腐病 *Colletotrichum aenigma*, *C. acutatum*, *C. siamense*, *C. viniferum*, *Gloeosporium fructigenum*

(生態と防除のねらい)

- ① 結果母枝、残果房軸、巻きひげなどで越冬するので、残果房軸、巻きひげ除去を徹底する。
- ② 前年発生園では、4月中旬頃から分生子を形成し、花穂に感染すると褐変し、鮭肉色の分生子粘塊を形成する。感染盛期は、開花期から袋掛け前で降雨が多いと発生が多くなる。感染後、未熟果のうちは潜伏し、成熟期に入ると鮭肉色の分生子粘塊を形成し、二次伝染を繰り返
- ③ 主要感染時期の開花期から袋掛け前の薬剤防除を十分に行う。
- ④ 前年多発生園では、休眠期の薬剤防除が重要でチオファネートメチル塗布剤の散布も有効である。また新梢伸長期や袋掛け後の薬剤散布を怠らないように行う。
- ⑤ 袋掛けは早めに行い感染機会を減らす。
- ⑥ 成熟期になり、減酸が進むと発病しやすくなるので、適期収穫に努める。

FRACコード*	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
M03	ジマンダイセン（ペンコゼブ）水和剤	マンゼブ水和剤	普	
M04	オーソサイド水和剤80	キャプタン水和剤	普	
M07	ベフラン液剤25	イミノクタジン酢酸塩液剤	劇	
M09	デランフロアブル	ジチアノン水和剤	劇	
1	ベンレート水和剤	ベノミル水和剤	普	
1	トップジンMペースト	チオファネートメチルペースト剤	普	
9 12	スイッチ顆粒水和剤	シプロジニル・フルジオキシニル水和剤	普	
11	アミスター10フロアブル	アゾキシストロピン水和剤	普	
21 M05	ドーシャスフロアブル	シアゾファミド・TPN水和剤	普	
29	フロンサイドSC	フルアジナム水和剤	普	
52	ミギワ20フロアブル	イブフルフェノキン水和剤	普	

(3) うどんこ病 *Erysiphe necator*, *Uncinula necator*

(生態と防除のねらい)

- ① 越冬伝染源は十分明らかではないが、おそらく芽のリン片間で菌糸の形成が行われるのが主体と思われる。発芽後間もなく発病し始め、次々と二次的に空気感染を繰り返して蔓延する。
- ② 霧の出やすいところ、日陰で風通しの悪い園などに発生が多く、6～7月頃、夜間が高温多湿で蒸し暑い天気が続くような場合に発病が多い。
- ③ 大豆粒期～袋掛け前にかけて、乾燥・冷涼気味の天候で果粒発病が多いので、この間の防除を徹底する。
- ④ 緑色系欧州種で発病が多いので注意する。
- ⑤ 被害果房及び果粒は早めに除去する。
- ⑥ 園の通風採光を図る。
- ⑦ 長梢剪定樹では、剪定時に被害枝を出来るだけ剪定する。

農薬名			毒性	備考
FRACコード	商品名	一般名		
1	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	普	
1	ベンレート水和剤	ベノミル水和剤	普	
3	トリフミン水和剤	トリフルミゾール水和剤	普	
7	カナメフロアブル	インピルフルキサム水和剤	普	
7	ケンジャフロアブル	イソフェタミド水和剤	普	
7	ネクスターフロアブル	イソピラザム水和剤	普	
7	パレード15フロアブル	ピラジフルミド水和剤	普	
7	フルーツセイバー	ペンチオピラド水和剤	普	
50	プロパティフロアブル	ピリオフェノン水和剤	普	

(4) ベと病 *Plasmopara viticola*

(生態と防除のねらい)

- ① 病原菌は、落葉した被害葉で越冬し、5～6月頃罹病葉で形成された分生子は風雨によって飛散し、葉裏から感染する。数日～2週間の潜伏期間の後、葉の裏側に白色粒状のかびが密生し二次感染を繰り返す。
- ② 生育適温は、10℃前後で低温、多雨の年に大発生する。多発生後の防除は困難で、多発生が予想される場合は、開花前から小豆粒期までの予防散布を徹底する。
- ③ 小豆粒期以降の薬剤散布は果粉の溶脱が起こるので、早めに袋掛けを行い、銅水和剤などを散布する。
- ④ 罹病葉はできるだけ清掃し園内から除去する。
- ⑤ 新梢の軟弱葉は、感染し易いので肥培管理に注意し、新梢が遅伸びしないようにする。あわせて副梢の除去・新梢の除去・新梢先端の摘芯を行う。

FRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
M01	I Cボルドー48Q	銅水和剤	普	
M01	I Cボルドー66D	銅水和剤	普	
M01	コサイド3000	銅水和剤	普	
M01	ムッシュボルドーDF	銅水和剤	普	
M02 M01	園芸ボルドー	硫黄・銅水和剤	普	
M03	ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤	マンゼブ水和剤	普	
M04	オーソサイド水和剤80	キャプタン水和剤	普	
11	アミスター10フロアブル	アゾキシストロピン水和剤	普	
11	ストロビードライフロアブル	クレソキシムメチル水和剤	普	
21	オラクル顆粒水和剤	アミスルブロム水和剤	普	
21	ライメイフロアブル	アミスルブロム水和剤	普	
21	ランマンフロアブル	シアゾファミド水和剤	普	
22	エトフィンフロアブル	エタボキサム水和剤	普	
M03 4	リドミルゴールドMZ	マンゼブ・メタラキシルM水和剤	普	
27 11	ホライズンドライフロアブル	シモキサニル・ファモキサドン水和剤	普	
29	フロンサイドSC	フルアジナム水和剤	普	
P07	アリエッティ水和剤	ホセチル水和剤	普	
M04 P07	アリエッティC水和剤	キャプタン・ホセチル水和剤	普	
40	レーバスフロアブル	マンジプロパミド水和剤	普	
40 49	オロンディスウルトラSC	オキサチアピプロリン・マンジプロパミド水和剤	普	
27 40	ベトファイター顆粒水和剤	シモキサニル・ベンチアバリカルブイソプロピル水和剤	普	
43 40	ジャストフィットフロアブル	フルオピコリド・ベンチアバリカルブイソプロピル水和剤	普	

(薬剤使用上の注意事項)

※ 薬害軽減のため銅水和剤を散布する際には、原則クレフノンを加用する。

(5) さび病 *Phakopsora meliosmae-myrianthae*, *Phakopsora montana* など

(生態と防除のねらい)

- ① 病原菌の生態については、不明な点が多いが、病葉で越冬し、翌春これが発芽して小生子を生じアワブキなどの中間寄主に感染する。そこにできたさび胞子が第一次伝染源としてブドウに伝染する。まれにブドウ枝内の夏胞子が第一次伝染源になることもある。
- ② 6～7月の予防散布に重点をおく。収穫後も早期落葉回避のため定期的に防除を行う。

FRACコード*	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
M01	I Cボルドー66D	銅水和剤	普	
M03	ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤	マンゼブ水和剤	普	

(6) 褐斑病 *Pseudocercospora vitis*

(生態と防除のねらい)

- ① 病原菌は枝幹に付着した分生子や落葉上の病斑などで越冬する。越冬した分生子は、風雨によって分散し感染する。潜伏期間は15～20日で、生育適温は25℃前後と高く、施設栽培での発病が多い。新梢基部の老化葉から発病し、二次伝染を繰り返す。
- ② 休眠期と開花前～小豆粒期の予防散布が重要である。
- ③ 収穫後も早期落葉回避のため、定期的に防除を行う。
- ④ 枝の粗皮剥ぎを徹底する。
- ⑤ 樹勢を強く保ち、葉の老化を防ぐ。

FRACコード*	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
M03	ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤	マンゼブ水和剤	普	
M03	チオノックフロアブル	チウラム水和剤	普	
M04	オーソサイド水和剤80	キャプタン水和剤	普	
1	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	普	
1	ペンレート水和剤	ペノミル水和剤	普	
3	インダーフロアブル	フェンブコナゾール水和剤	普	
3	オンリーワンフロアブル	テブコナゾール水和剤	普	
7	カナメフロアブル	インピルフルキサム水和剤	劇	
11	アミスター10フロアブル	アゾキシストロビン水和剤	普	
11	ストロビードライフロアブル	クレソキシムメチル水和剤	普	
52	ミギワ20フロアブル	イブフルフェノキン水和剤	普	

(7) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

(生態と防除のねらい)

- ① 葉や花、果梗、果実などに発病するが主に開花前後の花穂、果房の被害が最も大きい。したがって、この頃に防除の重点をおく。
- ② 病原菌は、多犯性でブドウ以外にもキュウリ、トマト、イチゴなどの果菜類やキク、ユリなど花類にも発病し、伝染源が広範囲にある。そのため、これらの栽培地帯の近くにあるぶどう園では、特に注意する。
- ③ 施設栽培は、多発条件になるので被害が大きい。近年は露地栽培にも発病が増加する傾向がある。
- ④ 園内の換気を行って通風を十分に行う。特に、開花～落花期にかけては多湿にならないよう注意する。
- ⑤ 病原菌は、空気伝染性のため低温多湿条件下で発病しやすく、開花期以降、短期間で急激に蔓延するので、防除適期を失わないようにする。

FRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
1	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	普	
1	ベンレート水和剤	ペノミル水和剤	普	
2	ロブラール水和剤	イプロジオン水和剤	普	
2	ロブラールくん煙剤	イプロジオンくん煙剤	劇	
10 1	ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤	普	
7	カナメフロアブル	インピルフルキサム水和剤	劇	
7	ケンジャフロアブル	イソフェタミド水和剤	普	
7	ネクスターフロアブル	イソピラザム水和剤	普	
7	パレード15フロアブル	ピラジフルミド水和剤	普	
7	フルーツセイバー	ペンチオピラド水和剤	普	
7 3	オルフィンプラスフロアブル	テブコナゾール・フルオピラム水和剤	普	
9	フルピカフロアブル	メパニピリム水和剤	普	
9	フルピカくん煙剤	メパニピリムくん煙剤	劇	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ水和剤	普	
9 12	スイッチ顆粒水和剤	シプロジニル・フルジオキサニル水和剤	普	
17	パスワード顆粒水和剤	フェンヘキサミド水和剤	普	
19	ポリオキシシンAL水溶剤	ポリオキシシン水溶剤	普	
M07 19	ポリベリン水和剤	イミノクタジン酢酸塩・ポリオキシシン水和剤	普	
29	フロンサイドSC	フルアジナム水和剤	普	
BM02	インプレッション水和剤	パチルス・ズブチリス水和剤	—	

(薬剤使用上の注意事項)

※ 同一系統薬剤を連用すると、耐性菌を生じるおそれがあるので連続使用しない。

(8) 枝膨病 *Diaporthe kyushuensis*

(生態と防除のねらい)

- ① 菌は巻きづるや枝幹の病患部で生存して感染を繰り返し、新梢では黒色病斑、2年生枝以上では節部にコブ状の膨れや節間にかいよう状の壊死を引き起こす。
- ② 柄胞子は、降雨時に湧出して感染するので多雨時、多雨年に発生が多い。
- ③ 菌を低密度に抑えるには、発芽前～開花期の防除が重要となるが、その後の防除を怠ると多発につながるため、年間を通じて防除する心構えが大切である。
- ④ 罹病苗木を持ち込まないようにする。健全苗でも罹病園内やその周辺に植え込むとすぐ罹病するので徹底した防除が必要である。
- ⑤ 苗木の導入にあたっては温湯処理(50℃:60~120分)を行う。
- ⑥ 窒素肥料の多用を避け、枝葉が過繁茂にならないようにし、健全樹を育てる。
- ⑦ 新梢は出来るだけ古枝と交叉しないように誘引する。
- ⑧ 施設栽培を行うと降雨による病原菌の伝染が避けられるので発病は少なくなる。
ただし、被覆を除去した場合、降雨による病原菌の飛散及び感染が起こるので 被覆除去直前からの殺菌剤散布が必須である。
- ⑨ 剪除した罹病枝を園内やその周辺に放置しない。

FRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
M01	キノンドーフロアブル	有機銅水和剤	普	
M09	デランフロアブル	ジチアノン水和剤	劇	
1	ベンレート水和剤	ベノミル水和剤	普	
11	ストロビードライフロアブル	クレソキシムメチル水和剤	普	
29	フロンスайдSC	フルアジナム水和剤	普	

(9) 白紋羽病 *Rosellinia necatrix*

(生態と防除のねらい)

- ① ナシ白紋羽病の項参照。

FRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
6	フジワン粒剤	イソプロチオラン粒剤	普	
29	フロンスайдSC	フルアジナム水和剤	普	

(10) チャノキイロアザミウマ

(生態と防除のねらい)

- ① 開花期（5月下旬）頃から成虫の寄生を認め、落花後から成、幼虫による加害が多くなり、6月中旬に袋掛け期まで前期の被害をもたらす。さらに6月下旬～7月に多発生して後期の被害を及ぼす。
- ② 果実の外観阻害が大きいので、加害期に予防散布を徹底する必要がある。
- ③ 常発生地帯では落花期から防除をはじめ、袋掛け期（落花25日後）まで数回散布する。特に落花後から小豆粒大と大豆粒大は重要な防除時期である。この時期の発生量は、年によって変動があり、茶での密度が低い場合は2回程度、高密度の場合は3～4回程度の散布が必要である。
- ④ 後期の被害を抑えるためには、袋かけ後の7月にも防除が必要である。特に巨峰など穂軸の被害防止には重要な時期である。
- ⑤ 水溶剤及び水和剤は果粒に汚れを生じるので、袋掛け直前には使用しない。
- ⑥ 茶樹やマサキ、サザンカ、ツバキ、マキなどの新芽に寄生繁殖しぶどうへの発生源となっているのでブドウ園周辺の寄主植物は除去する。

IRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
3A	バイスロイドEW	シフルトリン乳剤	劇	大粒種のみ
3A	アーデントフロアブル	アクリナトリン水和剤	普	登録はアザミウマ類
3A	アディオオン水和剤	ペルメトリン水和剤	普	
3A	アディオオンフロアブル	ペルメトリン水和剤	普	大粒種のみ
3A	テルスターフロアブル	ピフェントリン水和剤	劇	
14	パダンSG水溶剤	カルタップ水溶剤	劇	大粒種のみ
4A	アドマイヤーフロアブル	イミダクロプリド水和剤	劇	登録はアザミウマ類
4A	アクタラ顆粒水溶剤	チアメトキサム水溶剤	普	
4A	スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶剤	普	
4A	ダントツ水溶剤	クロチアニジン水溶剤	普	
4A	ベストガード水溶剤	ニテンピラム水溶剤	普	登録はアザミウマ類
4A	モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリド水溶剤	劇	登録はアザミウマ類
5	ディアナWDG	スピネトラム水和剤	普	登録はアザミウマ類
9B	コルト顆粒水和剤	ピリフルキナゾン水和剤	普	
13	コテツフロアブル	クロルフェナピル水和剤	劇	
13	コテツフロアブル	クロルフェナピル水和剤	劇	常温煙霧
28	エクシレルSE	シアントラニリプロール水和剤	普	登録はアザミウマ類
28	テッパン液剤	シクラニリプロール液剤	普	
30	グレーシアフロアブル	フルキサメタミド水和剤	普	

(11) フタテンヒメヨコバイ

(生態と防除のねらい)

- ① 薬剤に対して比較的弱い害虫であり通常は他害虫の防除により併殺され、低密度となっている。本虫の被害が問題となるのは殺虫剤散布の少ない園である。
- ② 一般防除園でも8～9月に多発することがあるので、発生には注意し初期防除を徹底する。この時期の多発生は越冬密度を高め、翌春の発生量を多くする。

IRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
1B	スミチオン水和剤40	MEP水和剤	普	
3A	アーデントフロアブル	アクリナトリン水和剤	普	
3A	アディオオン水和剤	ペルメトリン水和剤	普	
3A	アディオオンフロアブル	ペルメトリン水和剤	普	大粒種のみ
3A	スカウトフロアブル	トラロメトリン水和剤	劇	
4A	アクタラ顆粒水溶剤	チアメトキサム水溶剤	普	
4A	モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリド水溶剤	劇	
14	パダンSG水溶剤	カルタップ水溶剤	劇	大粒種のみ

(12) スカシバ類

(生態と防除のねらい)

- ① 成虫は、5月上旬～6月中旬の年一回発生し、葉柄の基部や新梢に産卵する。幼虫食入箇所は始め紫赤色に変色し、虫糞が出ているので容易に発見できる。また、少し経つと食入箇所は紡錘に膨れる。
- ② 食入初期の幼虫には防除効果が高いが中齢、老熟幼虫に対しては効果が劣るので防除適期を失わないように注意する。
- ③ 本虫の防除には薬剤散布だけでなく、食入幼虫の刺殺や被害剪定枝の処分などの総合的な防除手段を講じることが大切である。
- ④ 幼虫は新梢を次々と転食するので食入箇所を見つけ次第捕殺する。
- ⑤ 剪定枝や樹上に残存する被害枝を除去処分する。

農薬名			毒性	備考
IRACコード*	商品名	一般名		
1B	サイアノックス水和剤	CYAP水和剤	普	登録はブドウスカシバ
1B	スミチオン水和剤40	MEP水和剤	普	登録はブドウスカシバ
3A	ロビンフッド	フェンプロパトリンエアゾル	普	
4A	スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶剤	普	登録はクワカシバ
28	フェニックスフロアブル	フルベンジアミド水和剤	普	

(13) ブドウトラカミキリ

(生態と防除のねらい)

- ① 被害枝内の越冬幼虫が発生源として重視されるが、長梢剪定の場合はほぼ30%、短梢剪定の場合は10%ぐらいが結果母枝にとどまり、大半は剪定枝内で越冬する。したがって、剪定被害枝の処分を含めた越冬期の防除に重点をおく必要がある。
- ② 7月の成虫発生盛期と10月上～中旬の幼虫食入前～食入初期の防除に重点をおく。
- ③ 剪定被害枝が主な伝染源になるので、梅雨期までに処分する。
- ④ 結果母枝や3～4年生枝にも越冬幼虫が潜んでいるので幼虫の捕殺及び幼虫食入箇所の剥皮に努める。

農薬名			毒性	備考
IRACコード*	商品名	一般名		
1B	トラサイドA乳剤	馬拉ソン・MEP乳剤	普	
1B	スミチオン水和剤40	MEP水和剤	普	
4A	モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリド水溶剤	劇	

(14) コガネムシ類

(生態と防除のねらい)

- ① 通常年1回発生するが、種類によって飛来加害期は異なる。早期発見に努め必要に応じて2～3回防除する。
- ② 少発生時には園内を巡視して捕殺する。特に行動の鈍い早朝に行くとよい。

農薬名			毒性	備考
IRACコード*	商品名	一般名		
3A	アディオオン水和剤	ペルメトリン水和剤	普	
3A	アディオオンフロアブル	ペルメトリン水和剤	普	大粒種のみ
3A	スカウトフロアブル	トラロメトリン水和剤	劇	成虫登録
28	エクシレルSE	シアントラニリプロール水和剤	普	

(15) ハダニ類

(生態と防除のねらい)

- ① ブドウに寄生するハダニは数種いるが大分県ではカンザワハダニとナミハダニ赤色型が多い。
- ② シャインマスカットで発生が多く、特に加温栽培では多く発生することがある。
- ③ 被害を受けると葉がかすれたようになり、黄化し早期落葉することがある。また、密度が高くなると果粒も被害を受け商品価値を損なうため、園地をよく観察し発生初期の防除に努める。

IRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
6	コロマイト水和剤	ミルベメクチン水和剤	普	
10B	バロックフロアブル	エトキサゾール水和剤	普	
13	コテツフロアブル	クロルフェナピル水和剤	劇	登録はナミハダニ、カンザワハダニ
20B	カネマイトフロアブル	アセキノシル水和剤	普	
25B	ダニコングフロアブル	ピフルブミド水和剤	普	

(16) ハスモンヨトウ

(生態と防除のねらい)

- ① 露地での越冬は一般に困難とされており、梅雨から初夏にかけて海外から飛来してくる成虫が主な発生源である。
- ② 加温栽培においては春期に発生することもあるが、これは施設内で越冬したものだと考えられる。
- ③ 園内を見回り、卵を見つけたら除去する。孵化後しばらく集団で生活するため、幼虫がついた葉ごと除去するのも効果的である。
- ④ 老齢幼虫は薬剤が効きにくくなるため、若齢幼虫期の防除を心がける。日中は土中等を好むため、夕方頃葉の両面にかかるよう散布する。

IRACコード	農薬名		毒性	備考
	商品名	一般名		
5	ディアナWDG	スピネトラム水和剤	普	
13	コテツフロアブル	クロルフェナピル水和剤	劇	
28	エクシレルSE	シアントラニリプロール水和剤	普	
28	フェニックスフロアブル	フルベンジアミド水和剤	普	
30	グレーシアフロアブル	フルキサメタミド水和剤	普	